

## RA の報告 II

南孝典（社会学研究科博士後期課程）

---

### はじめに

今回の RA では 3 人の学生のレポート指導を担当した。そのうち 1 名は、最初の連絡から音信不通になってしまったが、他の 2 名は、それぞれ就職活動や卒論などの多忙の合間をぬって、なんとかレポートを提出してくれた。講義＝演習連結型授業の業務を行うのは、TA を含めるともう 4 度目となるが、決してこれまでの経験を活かしてスムーズに作業を進めるといった感じではなく、むしろ毎回新しい学生を前にして手探りで関わり方を模索しているというのが正直な思いである。もちろん、学生たちとどのように向き合ったのかを振り返っておくことは、自分自身にとっても今後のレポート指導の活動にとっても有益であるに違いない。そこで、今回の RA における学生とのコミュニケーションの内容を振り返り [1]、「講義＝演習連結型授業」の形態が今後より一層多くの講義で取り入れられるために、いくつか気づいた点を述べることにしたい [2]。

### 1 学生に対する指導内容と評価について

#### A さんのケース（社会学部 3 年）

A さんは、最初に面談をしたときに受講理由を尋ねたところ、大学生の間に一度しっかりと古典を読んでおきたかったからだと答えていた。そのように非常に意欲的であった A さんだが、むしろそのことから課題レポートのためのテキストが中々決まらないでいた。しかし最終的に彼は、卒業論文で平和論に取り組みたいという考えからカントの『永遠平和のために』を選択した。そして A さんは、1 月の個人発表を早い段階から希望していたので、その個人発表を目標に計画を立てることにし、どのキーワードで内容を説明するかについてと発表原稿の完成に関しては、具体的な締め切り日を設けて作業を進めてもらうことにした。

A さんとのコミュニケーションは、彼が 3 年生の後期という就職活動の多忙な時期で

あったため、彼のペースに合わせてメールを中心に行った。彼の選択した『永遠平和のために』が比較的短く平易な文章であるため、メールで行った質問のやりとりも、著作の内容的な理解に関するものではなく、レポートの書き方に関するものが大半だった。特にAさんは、いつもレポートを書いていくためのとっかかりがうまくつかめないとこぼしていたので、彼には、設定されている課題をしっかりと把握してからテキストにあたる必要を指摘した。具体的には、今回の講義のシラバスでは「①指定された文献を精読し、その内容を要約すること。②その際、キー・ワードを3つ挙げ、それらの理論的関連を説明しつつ、論文の論理構造の把握に努めること。③最後に、取り上げた文献の内容に対する自分の見解を述べること」と課題が設定されていたので、「この著作の問いと主張はどのようなことか?」、「著作の内容の核となるキー・ワードは何か?」と自分が質問されていると思ってテキストにあたること、また気になるキー・ワードをカントが具体的に説明している箇所に注意することなど、そうした点に言及した。このことによって、仮草稿の段階で既にしっかりと課題に答える形になっていたが、課題の③にあたる自分の見解が中々書けないと困っていた。そこで「国内法とも国際法とも異なる世界市民法の必要性を訴えたカントの動機は何だと思うか?」など幾つかの質問を投げかけ、学生の自発的思考を促すことを試みた。

こうした働きかけに効果があったのかどうかはわからないが、最終的なAさんのレポートは、講義の課題にあった①、②、③のそれぞれの点にしっかりと答えていた。このように水準の高いAさんのレポートや個人発表の内容に関して私の印象に残ったことは、「自然」という言葉のカントの使い方に関して、Aさんが違和感を表明していた点である。Aさんは、「永遠平和」を保証するものとされる「自然」を「神」のようなものと感じたと発言していたが、この点については、その場で平子先生から、西洋思想における「自然」の語の意味の変遷と、特にカントがそこでは意図的、戦略的に「神」と言わずに「自然」と言っていることについて説明があったので、彼もしっかりと納得できたようであった。

またレポートの感想部分では、理性を重んじる西洋の考え方に関して批判的に述べつつ、理想の重要性とそれを現実化することの困難さとの緊張関係について言及されていた。こうしたAさんの発言の背景には、タンザニアでのボランティア活動の経験も影響しているようだが、いずれにしても『永遠平和のために』を精読することで批判的な問題意識を獲得したことは、卒業論文で取り組むべき課題を発見できたという意味でも、非常に有意義であったと言えるだろう。

#### Bさんのケース（社会学部4年）

Bさんも、最初の面談では、古典を読んでおきたいという思いからこの講義を受講したと話しており、彼は比較的早い段階でルソーの『社会契約論』を課題テキストに決定した。ちょうどBさんは、教育社会学で「男らしさ」についての卒業論文を準備していて、後期がまさに卒論作成の時期にあたることから、卒論についてのアドバイスなども求めていかと尋ねてきたので、全く問題ないと答えておいた。結果的には卒論についての質問はなかったのだが、卒論に関する論文指導を期待する学生は少なくないかもしれないと思った。

Bさんとのコミュニケーションも、4年生で大学に来ることが少なく、まとまった時間がとれないという理由から、メールを中心に行った。卒論の執筆のこともあって、レポートの作業の進捗は芳しくなかったが、懸案の卒論が完成してからはメールでのやりとりも頻繁となり、それをうまく活用しながら作業を進めてくれた。

Bさんからの最初の頃の質問は、「端的に内容がつかめないのでどうすればいいですか?」、また「どのキー・ワードがレポートに書きやすいですか?」というものであった。その質問にどのように答えればいいのかいろいろ考えたが、既に時間も限られていたので、自分自身の理解する『社会契約論』全体の概観や、その中で興味深いと思われる幾つかのキー・ワードとその理由を、少し長い文章で提示して、Bさんの理解の叩き台にしてもらうようにしてみた。また、細かい内容的な質問だけでなく、レポートの構成についての質問もあったので、昨年のTAで担当した学生や今回のAさんの構成を説明して、それを参考にするようにアドバイスをした。

こうした質問の頻繁なやりとりとは対照的に、Bさんは中々原稿を仕上げることができず、仮原稿の状態を確認することはできなかった。だがBさんが執筆の作業に手間取った理由は、最終的に提出されたレポートに目を通したときに納得できた。Bさんのレポートは、全体の要約という課題の私の説明がうまく伝わらなかったために、著作の各章ごとを丁寧にまとめる形で仕上げられていたのだが、おそらくそのようなやり方で作業を進めたことで時間がかかったのだと思う。もちろん、こうした丁寧な作業は大いに評価されるべきものであり、その内容の理解も十分適切なものであった。

Bさんは、レポートの最後でも指摘していることだが、ルソーの『社会契約論』の話がなんだか美しすぎると話していた。私はその指摘に対しては、全くそのとおりであって、理想や理念とはそもそもそういうものだと言った。もちろん、理想や理念の実現が困難だという理由だけでそれらは批判されないということ、困難な現実を前にしてどこへ進んでいけばいいのか、その方向を指し示すものが理想や理念であること、更にそうした方向性

を示してくれる内容を含んでいるからこそ古典と呼ばれる作品は親しまれてきたのだということ、こうしたことも付け加えておいた。彼の最終的なレポートは、学生が社会思想の古典と格闘することの重要性を示していると言えるだろう。

## 2 「講義＝演習連結型授業」の必要性和問題点について

最終日の講義のあと、平子先生と RA のメンバーが集まって総括的な意見交換を行った。私は、その話し合いの中で他の RA の作業を聞いたことで、今回の RA が今後の活動にとっても非常に意義あるものだったと実感することができた。そのことについて最後に少し述べておきたい。

実は、今回の RA を始めるにあたって、レポート指導の際に学生との面談を義務づけるかどうかで話し合いを行っていた。そのような話し合いを行った理由のひとつには、昨年のアンケート結果を見ると、メールのみによるコミュニケーションに不満を感じていた学生が少なくなかったからである。しかしそのとき私は、多忙な学生に面談を義務づけることには強く反対をして、学生がメールや面談を自由に選択できるようにすることを主張した。というのも、メールよりも直接会って話をしたいという学生の希望に応えなくてはならないことはいままでの間もないが、一律に面談を義務づけることに関しては、その説得的な理由が見当たらなかったからである。

とはいえ、そのように発言したものの、私自身それでいいと思っていたわけではなかった。学生の自主性、自発性を重んじる必要があることは当然だが、ただ自発性を重んじるだけでは、これまでの「講義＝演習連結型授業」が抱えてきた問題、つまり消極的な学生についてはどのように対応すればいいのかという問題がそのまま残されてしまうと思ったからである。

「講義＝演習連結型授業」は、まず何よりも、そこに関わる学生の意欲によって取り組み方が大きく変わらと思うが、今回の業務では、学生との関わり方、進め方を個々の RA の裁量に任せて自由にしたことで、それぞれの取り組みが非常に個性的なものとなった。そして、この作業の中に上記の問題に答えるヒントも隠されているように思う。その細かい内容についてはおそらく報告集に記されていると思うので言及しないでおくが、特に小谷君が体育会系の雰囲気でもはたらきかけて、最終的にレポートを仕上げるまでにもっていったことは、非常に考えさせられた。また他の RA の話を聞いて重要だと感じた点は、RA として学生とコミュニケーションを取る前にまずしっかりと

会って話をしておくこと、可能であれば講義を共に聴講すること、そして学生に対してテキストを共に読むという姿勢を示すこと、こうした点であった。特に最後の点は、古典を読むというレポート指導の場合には特に重要な点に違いないし（特に宮本さんと小谷君の報告がそれを伝えているだろう）、この古典を読むという作業の場合には、とりわけ RA という存在の必要性が際立ってくるのではないだろうか。

もちろん、問題点もなかったわけではない。それは以前の活動でも指摘してきた制度的な問題であるが、やはり学生の受講数が確定する前に RA を決めなければいけないという点は問題があると思う。今回は、人数が少なかったことでかえって中身の濃い指導を行うという良い方向に作用したが、逆に数十人もの受講生をひとりの RA が抱える場合、学生に対して適切なコミュニケーションがとれるかどうかは大いに疑問である。

いずれにしても、Bさんの報告の箇所でも言及したように、論文を書くという孤独な作業に何がしかのサポートを期待するという学生のニーズは非常に高いと思う。それゆえ、上記のような制度的な問題点が改善され、意欲ある多くの院生が関わる「講義＝演習連結型授業」が更に一層拡充されることを期待したい。

---

南孝典（みなみ・たかのり）  
社会学研究科博士後期課程3年  
専門分野：フッサー現象学  
論文「フッサーにとってカントを語ることの意義  
とは何か」（フッサー研究会編『フッサー研究』  
第6号、2008）など